

2 「学校再開後」の対応

(2) 指導の工夫

- ア ICT 及び教具の活用
- イ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた工夫
- ウ 「特別の教科 道徳」に関する取組



兵庫県マスコットはばタン

遠隔教育システムを活用した学習活動（小・中学校）

他校との交流授業や、学校内での感染リスクを低減させるため、遠隔教育システムを活用した学習活動を実施している。

小学校の外国語授業では、近隣小学校の教室と遠隔教育システムを通じて通信し、直接接触を避けつつ自己紹介を実施した。

医療的ケアを必要とする児童生徒の感染リスクを低減させるため、遠隔教育システムで教室とケアルームをつなぎ、学習の様子を見られるようにした。映像で学習活動を見ることで、別の場所で学習していても、児童生徒の学習への参加意識を高めることにつながった。



↑ 遠隔教育システムを活用した交流授業

校舎内における Zoom 活用授業（小・中学校）

目安の身体的距離「1メートル」を確保するため、1学級ずつの5、6年生をそれぞれ2グループに分け、半分の児童が隣の教室に移動し、オンラインで授業を受けた。

教員はA教室で授業をし、その様子を「Zoom」で隣のB教室に配信。B教室の児童は、スクリーンに映し出される動画を見ながら学習をした。B教室の隅に設置したカメラで

B教室の様子がA教室の教員の手元のパソコンと電子黒板に表示される。女子児童は「やりにくさはないけど、みんなで授業を受ける方がいい」と話していた。



←電子黒板に B 教室の様子が映し出される。



←挙手すると、向こうの教員がパソコン上で B 教室の児童を見つけて指名する。

デジタルドリル (小・中学校)

ICT を活用した取組として、授業や学習タイムにデジタルドリルの活用を始めた。

習熟度により、課題を選択できるだけでなく、学校と家庭の両方で取り組むことができるため、今後も継続していきたいと考えている。



↑ デジタルドリルにチャレンジ

授業スタイルが一変したコロナ禍においては、児童間の距離を確保し、マスクを着用した状態で活動を行う。話し合い活動なども、これまでのようには行いにくくなっているため、意見交換や話し合いなども、ICT のコミュニケーション機能を有効的に活用し、対話的な学びを推進している。

オンライン授業実現への取組 (小・中学校)

再び休校措置が必要となる時に備えた対策として、1学期からオンラインでのクラス学活練習の取組を行ってきた。

2学期からは各教科でのオンライン授業実現への取組を始めた。

教室の生徒全員がタブレットを持ち、教員が別室から授業を行ったり、逆に生徒がい



↑ 音楽 3ヶ所中継合奏

くつかの場所に分散して、授業を受けたりするなど、様々な形の取組を行った。特に、中学校2年生の音楽では、音楽室、被服室、家庭（自宅待機の生徒）の3ヶ所に分かれての合奏を試みることで、オンライン授業の問題点を確認することができた。

体験する学習を可能にする様々な工夫（小・中学校）

新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、地域と連携した活動や社会見学などが軒並み中止や延期を余儀なくされた。しかし、子ども達にとって、本物に触れ、体験する学習の意義は大きい。そこで、次のような工夫をして実施した。

- ・ 教室ではなく広い体育館で実施
- ・ バスの乗車人数や一度に参加する学年の人数を半分に分け、同じ内容で分散型の社会見学を実施
- ・ 社会見学に行く代わりに、タブレットで事前に教員が取材動画を作成し、教室で授業に活用
- ・ 社会見学に行く代わりに、漁協の方をゲストティーチャーとして招きプロジェクターを使って体育館で海苔の特別授業
- ・ タブレットを使って体育館からのリモート中継による児童会の立会演説会。児童は各教室で視聴



↑ ゲストティーチャーと体育館での打合せ

1人1台タブレットの活用（小・中学校）

ペア学習やグループ学習において、意見や考えの交流・共有を図る際には、児童同士で直接会話をせずに、1人1台所有しているタブレットを活用する。

ロイロノートを使って、それぞれの意見や考えをタブレットの画面上に映し出すことで、すべての児童に見えるようにする。

具体的には、算数では「図形の面積」「単位量あたりの大きさ」などの多様な意見を引き出す授業、国語では「話す」領域や討論を取り入れた授業等で有効である。

また、社会見学に行く代わりに、「バーチャル自動車工場見学」「新聞ができるまで」などのVR動画等を活用した授業を展開している。



←タブレットを活用している様子

クラス全員の意見を →
タブレットで交流・共有できる



プログラミング教材「WeDo」を使った学習（小・中学校）

6年生理科「発電と電気の利用」の単元でプログラミング教材「WeDo」を使った学習に取り組んだ。

個人やペアで話し合った意見をホワイトボード上で操作することにした。従来の話し合い活動と同様の効果を得ることができた。お互いの意見の相違に気づき、友だちの良い意見を受容しながらより良いプログラムに近づけようとする姿勢が見られ、班としての一体感も芽生えた。また、学習活動をミッション形式で提示し、ゲーム性のある活動に主体的に取り組ませる時に、感染予防対策としてソーシャルディスタンスを保ちながら、授業を展開した。

↓ ホワイトボードを使っての話し合い



グループ活動を可能にする取組（小・中学校）

学校再開後は、マスクの着用や手洗いの徹底、アルコール消毒といった対策はもちろんのこと、授業においても可能な限り密を避けながら学習を進めた。

グループ学習を行う際には、これまで4人グループを基本としていたが、正対することを避けるために3人グループで行い、

互いの顔が見えるようにしながら、距離を確保するようにした。そして簡易ホワイトボードを活用し、伝えたいことの要旨を記入させてから短い言葉で交流するよう工夫した。

また、中学校区内の特別支援学級の交流会では、実際に集まることを避け、4校でオンライン交流を行った。画面を通してクイズやゲームを楽しみ、心に残る交流ができた。



グループでの話し合いの様子

オンライン交流の様子



Meet を使ったオンラインライブ授業（小・中学校）

緊急事態宣言下の臨時休業中に、児童1人ずつに Google アカウントが発行された。これを受け、本校では一刻も早く学校と家庭をつなぐことを想定して、保護者向けに分散形式での Google Chrome 説明会を開催した。

その後、各担任が Classroom に児童たちへのメッセージを書き込んだり Meet を使ったりして、つながりを持った。

さらに分散登校が始まってから、6年生は Meet を活用して自宅にいる児童とオンラインでつなぎ、登校している児童と同時進行で授業を受けることができるようにした。

この取組により、オンライン接続できない家庭があっても、登校時にもう一度同じ授業を受けることができ、学びを保障することができた。



↑ Meet を使ったオンラインライブ授業

既存のTV放送システムの活用（小・中学校）

当町で最も児童数が多い小学校では、全校児童が480名を数え、体育館に全校児童が集うと「密」を防げない。そこで、古いTV放送システムを改修した。デジタル化する機器、パソコンとカメラ等を切り替える機器、照明機器などを整えるとともに、バックパネルも手作りした。

朝会や始業式・終業式だけでなく、児童が自主的に企画・運営する児童集会もTV放送で実施している。今では、カメラワークや画面の切り替え操作も児童が行うようになり、3択クイズ、リズム体操、絵本の読み聞かせなど、内容も充実してきている。

タブレット端末を利用する方法もあるが、TV放送は大画面を見ながら、学級の児童全員で活動できる点で優れている。



↑ TV放送スタジオの様子

Zoom を活用したスキー教室事前授業（小・中学校）

スキー教室を実施するにあたり、体育担当が中心となって全校生に Zoom を活用した事前授業を実施した。

密を避け、各教室に習熟度別の班に分かれたが、Zoom を活用することで効果的な指導ができた。

具体的には、スキー教室における感染対策などは、パワーポイントなどを使い全員に指導した。その後に、習熟度別に担当の教員から班における注意点などの事前指導を行った。

Zoom を活用したことで、互いに顔を見ながら共通の疑問点を解決できた。また、パワーポイントやビデオなどの資料も大変分かりやすいと好評であった。



大型提示装置を活用した時間割編成と負担軽減（小・中学校）

学校再開当初、分室による分割授業を実施するにあたり、教員の授業時間が単純に2倍となり、時間割編成が課題となった。

この課題解決に向け、大型提示装置を介しての授業を実施した。提示装置による授業を行う教室では、複数の教員が関わった。

長期にわたる臨時休業により、学習に不安を感じている生徒が多かったが、多くの教職員が関わることにより、生徒に寄り添った指導となり、学習も含めた学校の教育活動全体に対する不安解消につなげることができた。



↑ 大型提示装置を使っでの説明

小小連携における ICT の活用（小・中学校）

小規模校では、かねてより自然学校や修学旅行を連合で行うなど小小連携に力を入れている。昨年までは自然学校を見据え、4年生が近隣の小学校に出向いて合同学習を行い、連合で活動することへの不安を和らげてきた。

今年は感染症予防対策として、リモートを活用した交流会を12月に実施した。2校をオンラインで繋ぎ、大型モニター越しに互いに顔を見たり声を聞いたりしながら交流を行った。自己紹介をする、互いの校歌を歌う、学校を紹介するクイズを出し合うといった内容で、互いの学校や児童の様子を知ることができた。クリスマスが近い時期であったので、交流の最後は一緒にクリスマスソングを歌いながら踊って楽しんだ。子どもたちからは「自然学校で出会うのが楽しみ。」という声が聞かれるなど、よい交流となった。



↑モニター越しに一緒に歌う様子

小小連携でオンライン授業（小・中学校）

- 小野南中学校区の市場小学校・来住小学校5・6年生を対象にオンライン授業を実施した。

- 明石高専の教員をゲストティーチャーにオンラインでプログラミング教育の授業を実施。同時に両校の児童が受講した。



↑受講している様子

- 児童は、今までに体験したことのない「学び方」に対して、「とても楽しかった。また体験したい」と新しい授業スタイルを、好感を持って受け入れた。

学習したことをリモート交流で発表（小・中学校）

例年は、同じ中学校区ユニットの小学校と、芸術鑑賞や自然学校で直接交流しているが、今年度は、リモート交流を実施した。

2年 生活科で行った「町たんけん」で学習したことを、リモートで発表した。

子ども達は、いつにも増して真剣な顔つきで緊張している様子であったが、自分たちが「町たんけん」で学んだことを、クイズや寸劇、実演などを取り入れて、楽しく聞いてもらえる工夫を凝らしながら発表することができた。

発表の後には、質問や感想を伝える時間を設け、画面越しではあったが、充実した交流活動となった。



↑ リモート交流の様子

オンラインによる全校集会（小・中学校）

Microsoft Teams のビデオ会議のシステムを利用し、各教室の大型モニターに、映像をライブ配信することで、実際に児童が集まることなく、オンラインで全校集会を実施した。

全校児童で同じ体験を共有することで、集団への所属感や連帯感を深めることができた。

発信する側にとっては、受信する側の反応をリアルタイムで確認することが難しいというデメリットがあったが、受信する側の反応を想像し、伝える内容や伝え方の工夫について、学習するきっかけとなった。



↑ 各教室の大型モニターを使用した全校集会

歌唱テストの中継（小・中学校）

歌唱時のマスクの着用は、息苦しいだけでなく、口の動き等の歌唱表現の評価も難しい。歌唱テストの適正な評価をするために受験者だけが第2音楽室で歌唱テストを行い受験者以外は別教室で中継を鑑賞する形式で実施した。

受験した生徒の感想では、「テストの形式はいつもと同じであるけれど目の前に生徒がいないので緊張することなく歌うことができた。」や「カメラと先生だけなので思い切って声をだすことができた。」などが多くあった。



↑ 歌のテストに臨む生徒

↓ 中継を鑑賞し評価する生徒



リモートでの食育講演会（小・中学校）

例年は体育館で、対面式の講演会を実施していたが、今年度は、リモートでの実施に切り替え、食育に係る講演会を行った。

講師は、生徒の表情や反応を見ることができない上、一方的な配信になることを心配していたが、カメラの向こう側にいる生徒を意識しながら、語りかけたり、質問を投げかけたり、ジェスチャーを織り交ぜたりしながら、話をしてくれた。

生徒からは「リモートではあったが話に惹き込まれた。」
「心と身体を健康を大事にしていきたい。」などの感想が寄せられ、充実した取組となった。



↑ 「食と健康」をテーマにしたリモート講演会

ゲストティーチャーと Zoom による交流（小・中学校）

今年度はゲストティーチャーを招いての学習の実施が困難であった。しかし、児童は学校外の方に教えていただくことが大好きであり、意欲的に取り組むことができる。そこで、Zoom を活用して講師からの課題を共有し、グループで考えを交流して意見をまとめたり、他の学級や講師に伝えたりすることに挑戦した。リモートでのやり取りもスムーズで、対話的で深い学びが実現できた。

各校で ICT を活用した学習が進んでいる。パワーポイントで学習のまとめを発表したり、意見を交流するコミュニケーションの手段として利用したりもしている。また、特別な支援を必要とする児童生徒にも有効な学習ツールであり、今後、様々な活用方法が考えられる。



←Zoom を活用して SDGs の授業

学習のまとめに →
タブレットを使用



同じ内容の授業を複数の教室で受けることを可能に（小・中学校）

学校再開までに情報担当の教員を中心にオンライン授業の取組を始めた。感染リスクを下げるために、同じ内容の授業をいくつかの教室に分かれて学習できるように準備を進めた。

はじめはうまくつながらず、授業者がパワーポイントで作った授業内容を各教室で説明したこともあったが、回数を重ねるごとに安定して行えるようになった。子どもたちも興味津々で、他のクラスの様子が映ったり、友だちの声が流れたりすると、集中して画面を見ることができた。

新型コロナウイルス感染症の感染予防だけではなく、児童生徒の体調に合わせて別室で学習することができるなど、メリットも多く、今後も活用を増やしていきたい。

↓授業者は別室で全体指導



前の画面を見ながら学習↑

電子黒板や WEB カメラの活用 (小・中学校)

電子黒板や WEB カメラなどを用いて配信による授業や行事を実施した。

- ①生徒会長選挙による立ち会い演説会を、各教室に WEB 配信で実施した。
- ②進路説明会では、保護者は体育館で教員の説明を聞き、3 年生徒はその内容を教室で視聴した。
- ③謡曲高砂において、講師による実演や指導を配信で実施した。

↓ 配信の様子



その他、学年集会や防災学習などにおいても配信による活動を実施している。生徒が同じ場所に多数、長時間集まることを避けるために有効な手段でもある。

プログラミング学習におけるロボットの製作 (小・中学校)

本校の 6 年生の児童が、プログラミング学習において、チーム毎に、学校の課題を見つけ、ロボットというテクノロジーを活用して課題を解決するロボットの製作に取り組んだ。

一つのグループが「学校で手指消毒が徹底できていないから、消毒を呼びかけるロボットを作ろう！」とテーマを設定し、試行錯誤を繰り返しながら製作に取り組んだ。

最初は、呼びかけだけだったものの「実際に消毒をして欲しい」という下級生や教員の要望を受けて、「自動消毒ロボット」という課題にアップグレードした。このロボットは、校内で他の児童に試験的に使ってもらい、何度も改良を加えながら完成した。



← 消毒ロボット
アルコール消毒液を
出すロボット

ようちゅうロボ
ット →
教室に入るように呼
びかけるロボット



全員の考えをスクリーンに映して共通理解 (小・中学校)

算数科の「三角形と四角形」の図形の仲間分けの学習では、タブレットを使って学習を行った。タブレット上で、図形を動かしながら考えられるので、考えの変更も簡単に行うことができる。

また、全員の考えを前のスクリーンに映して見ることができるので、自分の席から移動しなくても友だちの考えを知ることができる。

今年度は、コロナ禍で密を避けるため、机の間隔を広くとって学習している。タブレットを使った学習は、効率よく学習を展開できるだけでなく、密を避ける意味でも効果的である。



↑全員の考えをスクリーンに

統合する園同士のリモート交流 (幼稚園等)

今年度末で閉園し、来年度より保育所と統合して新しくこども園となる。4歳児は、来年度同じ園で同級生となる保育所の子どもたちと交流を行いながら、来年度を迎えようと思っていた。

しかし、実際に、互いの園を訪れて交流することが難しい状況のため、リモートで交流することにした。まず、あらかじめ、絵や手紙のやり取りをした。そして、その受け取った絵を保育室に掲示し、リモートで交流を行った。クラス名の紹介や互いの園歌の紹介、遊んでいる体操等を見せ合ったり、質問をし合ったりした。次の交流まで、共通の歌を歌ったり、体操をしたりするなど、共通の遊びがあることで、来年度の生活が楽しみとなった。

リモートで対面→
しているところ



←わずかな時間でも
親しみを感じるよう
になった

社会科におけるオクリンクの活用 (小・中学校)

6年生社会科「江戸幕府と政治の安定」の単元で、オクリンクを活用し、資料の読み取りと意見交流を行った。オクリンクで意見を送信し合うペア学習や意見交流は、感染予防の対策をしながら、少しでも主体的な学習を行うために大変有効な手立てであった。児童の発表において、タブレットは提示資料へ、直接記号や文字が記入できる。このことは、言葉で表現が苦手な児童も、表現方法を工夫でき、より主体的に発表しようという意欲が高まる様子が見てとれた。班で話し合うような学習形態がとれない中、ICT機器を積極的に活用することで、児童の主体性を高められる取組となった。



↑オクリンクで意見交流をしている様子

一人一台のタブレット端末の活用 (小・中学校)

主体的・対話的で深い学びの実現に欠かせない話し合い活動が密を避けるために制限される状況で、自分の考えを発信したり、友達の意見を受け取ったりしながら考えの幅を広げる機会を確保することが困難になっていた。



Google スライドをつくっている様子

中学3年の理科で「環境問題」をテーマとした授業において、一人一台のタブレット端末を活用して、調べ学習を行った。調べた内容を Google スライドにまとめさせ、Google クラウドのストリームに添付することで、誰でも他の人が調べている内容をリアルタイムに閲覧することができるよう工夫した。また、友だちへの質問やコメントを伝えるのにチャット機能を活用させた。それによって、友だちの意見を取り入れたり、新しい視点を得たりしながら自分の考えをまとめていくことができ、深い学びへとつなげる取組となった。

リモート生徒会選挙 (小・中学校)

今年度は、Google の Meet を利用しての生徒総会や生徒会選挙を行った。生徒総会では、パソコンを複数使用して、司会を行う者、演説を行う者などを分けることで、配信先の学級に伝わりやすい内容に工夫した。全校生を目の前にすることはできなかったが、ライブ配信の中で良い緊張感をもってリーダー達が臨むことができていた。生徒会選挙では Google の Forms を使用し、一人一人がタブレットを使用した投票を行った。初めての試みであったが、生徒が意欲的に機器を使用する姿が見られ、これからの3密を避ける良い手立ての1つとなった。



↑ 生徒総会：各学級への動画配信

リモートによる集会活動 (小・中学校)

感染症拡大防止から、リモートで全校朝会や児童集会などを実施した。

会議室にカメラを設置し、その様子を各クラスに配信。これまでの集会活動同様に、教員が司会進行する全校朝会、児童生徒が主体となって進めていく児童集会を通して、学校全体で共有したいことなど、大切なことはコロナ禍でも手段や方法を変えて、実施することができている。



↑ リモートで児童集会を実施

Zoom を活用した酪農家と学校をつなぐ体験学習（小・中学校）

ふれあい酪農体験事業の学習を Zoom を活用して実施した。酪農家の仕事の様子、牧場や牛舎をスクリーンを通して見学できるようにした。通常の社会科見学のように移動時間や交通手段の確保が必要ない分、児童や教員の負担は少なくてすんだ。しかし、現地見学での五感を使った学習はできないため、事前に牛の飼料等の実物を学校に送付してもらうことで、児童は、牛が食べているスクリーン映像とあわせて、手に取った飼料の感触やにおい等を感じながら、酪農家の話を聞くことができた。オンラインで現地と学校をつなぐ学習形態は、実物準備などの工夫を行うことで、効果を上げることができた。



↑スクリーンに映された牛舎前の酪農家の方



↑画面を通じて、酪農家の方に質問する児童

Zoom を活用した生徒会選挙（小・中学校）

これまでのような全校生が一堂に会しての生徒会選挙は、感染症対策のため取りやめた。そこで、Zoom と大型モニターを活用して教室で立候補者の演説を視聴する学級、体育館で直接聞く学級に分けることで、密を防ぐ工夫を行った。放送による音声だけでは、どのような生徒が立候補しているかは把握できないが、画面を通して立候補者の表情や語りぶりを視聴することで、誰に投票しようか考えることができる環境を確保できた。また、Zoom を活用することにより、なぜ通常の形態で生徒会選挙を行わないのか生徒自身が考える機会となり、より一層の感染症対策への意識の向上につながった。



↑生徒会役員に立候補する生徒たち



↑画面に向かって演説をする生徒

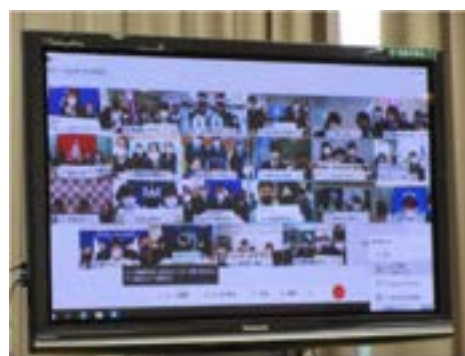
市立高等学校サミット（生徒会活動）（高等学校）

2020年12月19日、市立高等学校サミットを行った。

今年は新型コロナウイルスの影響もあり、リモートでの開催とし、半年前から市立3校の合同生徒会で準備を進めてきた。

当日は全国から22校が参加してのサミット開催となった。今年のテーマ「メディアで地域活性化～高校生にできること～」について、各校がそれぞれの地域で抱えている問題を出し合い、高校生ならではの様々なアイデアを出して、各地域の活性化について話し合った。

今回のサミットで、全国さまざまな高校の生徒会がどのような活動を行っているかについても、知ることができた。



↑ サミットをリモートで開催

すべての集会的行事をリモートで実施（小・中学校）

新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策として、体育館での集会をリモートに代えて実施した。始業式や全校朝会、児童会選挙等。本校で集会的行事をすべてリモートで実施できたのは、ICT環境が整備されているためである。タブレット、天井吊り下げ式液晶プロジェクター、吊り下げ式スクリーンが各1台教室に設置されている。ICT機器に不慣れでも簡単に操作できることが大切である。児童は、リモート集会を経験し、カメラ前での位置取り、話す声の大きさ等を身に付けている。リモート集会等新しい学校の生活様式に、児童たちが柔軟に対応できたことがよかった。



↑ リモート始業式の様子

検温等の実施の工夫（小・中学校）

休校中より健康状態把握のため、生徒・教職員ともに、「健康観察カード」を用いた健康観察を実施していた。学校再開に当たり、健康観察をFormsを利用して実施したいと考え、まず教職員へ先行実施した。

Formsによる健康観察の利点は、その日の教職員の健康状態が一覧で把握できるという点である。また、教職員は、自宅からスマホで送信できるため、管理職等は、出勤前に健康状態を把握できる。部活動においても顧問がFormsを利用して早朝練習前に健康状態を把握している部もある。今後は、全校生へ広めていき、さらに健康観察の徹底を図っていきたい。



「サンタさんきてね！」(幼稚園等)

園庭のシンボルツリー「ポプラ」を剪定することになり、切った木の枝や葉っぱで遊ぶ姿が見られたことから、ポプラの木で何かできないかと幼児たちが考え始めた。クリスマスの飾りを作っていた時期と重なり、大きなクリスマスツリーを作ることになった。今までの経験や絵本等を見ながら「飾りがいる」「星とかリースもかわいいかも・・・」とアイデアを出し合った。

今年は、3密を回避するため園庭に組み立てた。広い空を見上げながら、サンタさんに思いを馳せイメージを広げて遊んだり、未就園児も一緒に飾りつけをしたりしながら、楽しむことが出来た。幼児たちには、大きなツリーに感動し、達成感を味わえた遊びとなった。



飾り付けをしているところ



主体的に遊び込むための教員の援助と環境構成「虫マップを作ろう」(幼)

6月、幼児は園庭に飛んでくるアゲハ蝶や卵、セミ等に興味をもった。例年であれば降園時に保護者に向けて幼児の遊びの様子や学びについて詳しく伝えていたが、密を避けるためにより分かりやすいドキュメンテーションを作成し、見えやすいところに掲示した。写真を多く使っていることから、幼児にとっても自分達の遊びを振り返りやすくなり、「虫研究所作り」や「虫マップ作り」など主体的に遊び込む姿につながった。

また、夢中で虫マップを作ろうとする幼児に保護者も心動かされ、近くの公園や通園路の虫やセミの抜け殻集め等にも協力してくれた。その結果地域の自然にも興味が広がり、物事をじっくり見る力、違いに気付く力、命を大切にする気持ちにもつながった。



友だちと虫マップを作っているところ



少人数による意見交換時の工夫（小・中学校）

主体的に考えを深め、認め合い、響き合い、高め合う児童の育成を目指して、対話を通して「分かる喜び」「できる楽しさ」が実感できる授業づくりに取り組んでいる。中でも国語科では、「話す・聞く」領域を中心に、対話を取り入れた授業を進めようとしており、そのためには十分な感染症対策を行う必要がある。



↑ 6年生国語「みんなで楽しく過ごすために」

そこで、少人数で意見交換を行う時は机上にアクリル板を設置したり、グループでの意見を全体に広げる時は大きな声を出さずに済むようにホワイトボードやICT機器を活用したりするなど工夫した結果、児童一人一人が自身の考えを深め、意欲的に学びに向かう姿が見られた。

子ども達が自ら発話したいと思う授業づくり（小・中学校）

今年から外国語が教科となり、本格的に教科書を用いた学習がスタートした。外国語科・外国語活動を研修のテーマとして4年目になる。その研修の場として研究授業を行った。

やり取りをメインとした授業であったが、全体でのドリル学習や個人での練習を繰り返し、自信を持ってコミュニケーションができるように心がけた。ペアを限定し、マスクをつけて、距離を保ちながら会話を楽しんだ。やり取りの回数は少なかったが、子ども達は自信を持って発表できた。



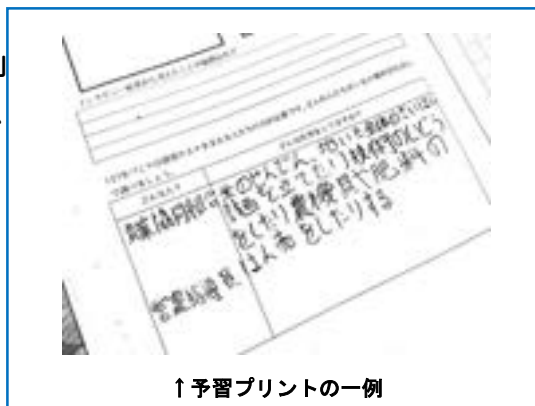
↑ ペアトークの様子

子ども達が自ら発話したいと思う授業づくりについて、学校全体で考える良い機会となった。今後は、タブレットを用いた発表活動やその評価等、withコロナ時代の新しい外国語科・外国語活動を目指して取組を続けたい。

臨時休業中の家庭学習を継続して「習慣化」(小・中学校)

社会科において「稲の品種改良」について学ぶ授業では、いきなり、「教科書にはどのように書いていましたか?」という教員の問いで始まった。

「農家の人々を支えている人には、どんな人たちがいるのだろうか」という問いに対し、子ども達は、「農業協同組合」「営農指導員」と、あらかじめ教科書で調べてきた内容を発表していた。



↑予習プリントの一例

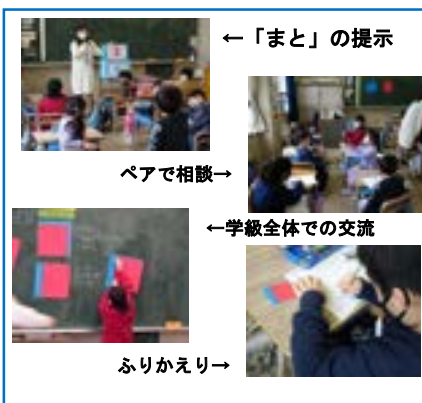
臨時休業中に作成・配付した予習プリントによる家庭学習を、学校再開後の通常の授業でも「習慣化」したという担任の先生は「予習プリントに取り組みせると、授業の中で考える時間を多くとることができ、子ども達の『主体的な学び』を促すことができる。『深い学び』に導けるような発問を考え、今後も続けていきたい」と話していた。

カリキュラム・マネジメントによる教科横断的な単元構想(小・中)

感染症対策を講じながらも、学びの質を高めるために、カリキュラム・マネジメントをもとに教科横断的な単元を構想し、児童の目的意識の高揚、既習内容の活用を図った。

1年生では、「まとあて(体育)」の「まと」を題材に「ひろさくらべ(算数)」を行った。そこでは、既習の「わ

けをはなそう(国語)」の話し方を意識的に活用する構成とした。「一目で判断しづらい具体物を比較する」など、話し合いたくなるように仕組み、非接触でのペアや全体の話し合い活動を設定した。友だちの考えと自分の考えを比較し、より良い比べ方を吟味したり、広さが正確に比べられる喜びを感じたりできるように働きかけた。そして、「ふりかえりの視点」を提示し、ふりかえりの充実を図った。



対話を取り入れた授業の工夫（小・中学校）

令和2年度高砂市教育委員会指定の人権教育研究発表会は、感染症対策を講じた上で実施した。特に、重要なテーマである「対話を取り入れた授業の工夫」においては、パーテーションを活用して行った。また、教科によってはホワイトボードを使用して意見交換を行った。生徒からは「対話を通して考えを深めることが出来た」という意見も多数出ている。今後導入されるタブレットなどのICT機器の活用など、さらなる工夫が必要である。

↓パーテーションを活用



文章作成を中心とする形態の学び合い（小・中学校）

中学校社会科で「学び合い」による学習を進めていたが、口頭による意見交流から文章作成を中心とする形態に変更した。

生徒は提示された「本時の問い」に対して、資料を読み解き、個人で熟考しながら文章を作成する。考えがまとまった生徒は教員から助言を受け、他の生徒に「学ぶことのサポート」を行う。活動に制約はあるものの、生徒全員が学習に没頭し、思考の輪が広がった。

生徒同士の対話的な「学び合い」と、主体的な個人学習が実践され、生徒の思考力と記述力は格段に向上した。教員は、安全に配慮しながら、生徒が学ぶ機会の工夫を継続して重ねている。



新型コロナウイルス感染症を取り上げた総合的な学習の時間(小・中)

「コロナと共存しながら幸せにくらすために～自分たちにできること～」と題した単元を設定した。市の新型コロナウイルス感染症対応の取組を調べ、関係部署にインタビュー活動等をした。

市の取組は人々の生活を支えるためのものであることを知り、調べた情報をさらに深く理解するため、何度も聞き取りをしたり、それらをもとに自らの考えを形成したりしながら、話し合い活動をする中で、児童から「全校生に伝えたい、届けたい」との思いが生まれることになった。下級生に伝えるための言葉や元気を与えられる行動とは何だろうと何度も議論する等、感染症というタイムリーであり身近なものをテーマに設定したことで「自分たちにできること」を考える学習活動になった。



↑コロナに負けるなプロジェクトと題し、全校生に発表するようす

自分の意見を他者に伝えられる工夫(小・中学校)

新学習指導要領の趣旨を踏まえ、児童の自主的な活動を充実させることを目的とする授業を計画した。

児童が自分の意見を他者に伝えることのできる力を育成することをねらいとして授業を行った。

そこで、グループ討議や個人の発表の際には、職員手づくりのパーテーションを活用し、話す児童も聞く児童も、安心しながら活動できる場を設けた。



↑パーテーションを工夫して発表

高校生との交流による食育（小・中学校）

食育については、昨年度も社高校生との交流で毎月1回実施していた。しかし、本年度は、開始時期が遅れたことや調理実習ができないなど計画の変更を行った。

社高校生には、各学年2名程度で授業に参加してもらうように依頼した。学年毎に入るメンバーを決めて、当日検温をして、風邪症状がある場合はメンバーを変更してもらいながら実施した。

感染対策をとっての実施となったが、その中で高校生が回数を重ねるごとに、指導方法や手順を工夫し、児童も楽しく学習することができた。



↑ 高校生指導のもと1年生が献立作成をしている様子

コロナ禍における言葉による関わり合いの重要性（小・中学校）

授業公開や講師招聘の規模を縮小して、研究に取り組んだ。授業研究では、関わり合いに注目して、グループトークやペアトークを取り入れてきた。自分の考えを述べることはできるが、他者の意見につなげて発信することが弱いので、意見の深まりがない。

そこで、授業中にトークで聞いた他者の意見を青字でノートに書き足したり、自分の意見と比較したりするように取り組んだ。

感染拡大防止のため、授業中もマスク着用、一定距離の確保は必須で、他者の表情や感情が分かりづらく、意思疎通が難しい。こんなときこそ、言葉による関わり合いが重要である。丁寧に表現した言葉が、日常生活を豊かにするよう研究を継続した。



↑ グループ討論

偏見や差別を許さない道徳的実践意欲と態度を育む取組(道徳)

<教材名>

わたしのせいじゃない(6年生)

<内容項目>

公正、公平、社会正義 C-(13)

<ねらい>

登場人物の様々な言動から、なぜいじめが起きるのか、さみしくつらい思いをする子に何ができるのかを考えることを通して、身近な差別や偏見を見逃さず、自分にできることを考え、誰もがよりよく生きる、安心して暮らすことのできる

社会を願い、進んでその実現に努めようとする道徳的実践意欲と態度を育む。

<指導にあたって>

「いじめや差別はいけないことだ。」と分かっているけれども、いざ身近なところで人権にかかわる問題に接したとき、周囲の雰囲気や多数の意見、人間関係に流され、傍観的な立場をとったり、無関心を装ったり、問題から目を背けようとしたりすることも少なくはない。そうした自分の心の弱さにも向き合いつつ、誰に対しても公平、公正であるためにはどうすればよいのか考えたり、周囲に助けを求めたりすることに躊躇しないなどの態度を身につけたりし、社会的な問題についても自覚を深めていくことができるよう授業を行った。



授業の様子

<板書の様子>

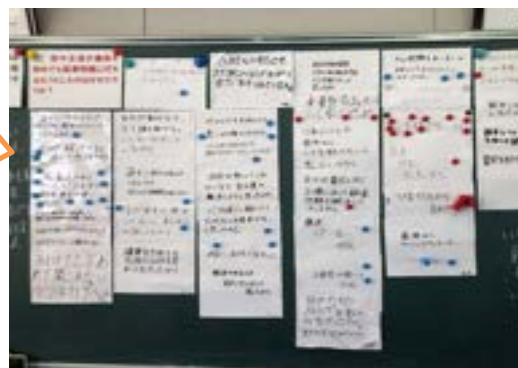


ホワイトボードとマグネットを活用した対話づくり(道徳)

道徳科の対話の場面において、感染リスクを減らすため、ホワイトボード(個人用)とマグネット(青・赤)を活用し、対話を深めた。ホワイトボードには個々の意見、青マグネットは共感、赤マグネットは疑問のサインとし、交流した。

工夫したポイント

- 感染症対策として個人のホワイトボード、マーカー、マグネットを使用。
- 密にならないように、列ごとにホワイトボードを貼る、マグネットを置く。
- 前を向いたままでも、ホワイトボードをもとに対話ができる。



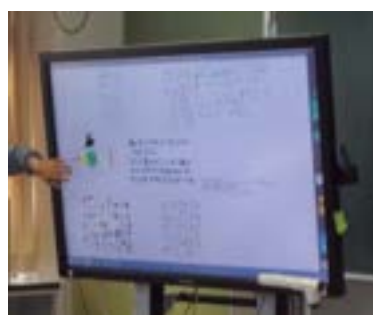
↑ホワイトボードとマグネットを活用した板書

タブレットを活用した考えを深める授業づくり(道徳)

研修テーマは「対話を通して自己を見つめ、考えを深める授業づくり」としている。中心発問で考えを深めさせた後、一人一人が『ぼく』になってしょうたに手紙を書く活動に取り組んだ。児童が一人ずつタブレットで手紙を書いて、それを電子黒板に写し、意見を交流した。

同じ考えや視点の違う内容に注目させることで、多様な意見や考え方に気付き、さらに考えを深めることができた。

教材名「友のしょうぞう画」 内容項目 友情・信頼 B-(10)



↑タブレットを活用した道徳科における対話の工夫

※子どもの書いた考えを提示する際、文字の丁寧さや誤字・脱字等により、からかい等が生じないような学級づくりや、発表前に個別指導をするなど、教員による配慮が必要である。